

なぜ美術を選んだのか 十河雅典/倉重光則/中村ミナト/菅沼緑/木嶋正吾/日影眩 2018/05/14-26 steps gallery Criticism by MIYATA Tetsuya Vol.203

ステップスギャラリーオーナー、吉岡まさみ渾身の企画展である。ステップス常連のベテランが出品し、一人一人が連日、トークを行った。今日に生きる第一線のアーティストの生の声が聞けるとは貴重な体験であったろうが、私は唯一日とも行けずに本当に無念である。吉岡がビデオによる記録を撮っている筈なので、公開を待つしかない。今回の展覧会の特徴はトーク主体で展示が付録なのではなく、やはり展示がメインであった。各人は巨大な作品を

用意したのではなく、かといって遠慮して小品を出品した訳でもない。自己のスタンスを崩さずに、通常通りの作品をギャラリーに持ち込んだ。それが新作か、旧作なのか、未発表であろうと関係がない。一度発表した作品でも場所が代われれば全く異なるように見えるし、相当に過去の未発表であっても画廊に飾り付けた瞬間に「いま、ここ」の作品となる。現代美術の作品とは既成の価値や常識を覆し、常に創造的な在り方を為す半面、アーティストである特権

を含めたあらゆる権威を破棄するので、攻撃されれば抵抗するどころか防御の用意がない為、一発で粉々に砕け散る。戦場を武器がないどころか裸で歩くようなものだ。しかし、この姿こそが人間存在の根底の在り方に繋がるのではないだろうか。このような作品発表は当たり前のように感じて、なかなかできることではない。どのような場面にも迅速に対応できるのが、優れたアーティストの証でもある。

そして更に凄いのが、この作品群を展示した吉岡のキュレーションである。中心がなくて何処を見渡せばいいのかわからないと思いきや、全ての作品が中心となって各作品の邪魔になるのではなく、作品の本質を引き立たせている。

私は自らが 1/10 のサイズになったら、と夢想した。するとここは巨大な美術館と化す。写真を低い位置から撮影すると、その感じが伝わるのではなからうか。現代美術はデカければ良い訳ではない。「神は細部に宿る」ではないが、寧ろ小さいほうが現代美術の繊細な感触を掴める。それでもここに展示されている作品群は、巨大美術館や国際展に展示されている作品を凌駕するのだ。

